



菅野榮子氏（飯館村からの避難者）とアレクシェービッチ氏

昨年、学生時代のYWCAの同期生で、アレクシェービッチ著「チェルノブイリの祈り」の読書会をしました。著者が来日され、ロシアと日本の原発事故についての思いを述べるドキュメンタリーの放映があるということで、我らグループはこれを見て、メールで感想を交換し合いました。

彼女は「私は人間の魂の声を聞く耳である」と言われます。それと同時に、彼女は原発事故の当事者であり、目撃者です。チェルノブイリ事故により避難させられ、当時医師として治療に従事していた妹を癌で亡くし、妹の遺児を引き取り、共に暮らしています。原発事故は他人事ではない、というのが基本にありました。

原子力発電所は国家が経済効率を狙って、科学技術を用い、作りだしたものです。それに用いられる放射性物質は、無色、無味、無臭、無音の猛毒物質であり、たとえ知識や情報があっても感知し得ず、ただ、危険性を正しく伝える専門のデータに従えば、初めて避けられるのです。ところが国の管理が破綻し、制御ができません。そして情報を隠ぺいしています。それがチェルノブイリとフクシマです。この科学技術による莫大な被害の中に、自然界の人間、動物、植物、土壌、水、大気は抵抗する術もなく、いつ終わるとも知らず、放り出されてしまったのです。

「チェルノブイリの祈り」の冒頭でインタビューに答えたりュドミーラの消防士だった夫の最期の病床が映像に残っています。肉体が崩れ、悲惨で酷いです。彼の傍を離れず看病するのが当たり前と信じ、愛し続けた妻は、その後、妊娠中の娘を臓器異常により失い、再婚によって得た息子も病気を抱えています。その息子にアレクシェービッチは短刀直入に質問します。「あなたはどう生きるの?」と。彼は母も父も愛し、この事故による病気と闘うために自分にできることをすると健気に淡々と答えています。アレクシェービッチ氏は「**どんなに孤独でも、人間としてあり続けることが人間を守るのだ**」と結論づけています。サマシオールと呼ばれている被災地の自宅で住み続ける老人たちは土地と一体化して生活していますが、時間の経過と共に朽ちていくかのようです。

アレクシェービッチ氏はフクシマの小高という原発の北16キロの集落を訪ね、話を聞きます。地震、津波、原発爆発と、立て続けに起こった災害によって、見捨てざるを得なかった命があったことを知ります。また、放射線量の数値が国のモニタリングでは低いのに、専門家の線量計では数倍も高いという実態を報告されます。仮設住宅を訪ね、飯館村からの避難者・菅野さんと話します。農地を失い、「原発さえなければ!」と言って、絶望して自殺した酪農家の遺族を訪ねます。彼らは除染済区域に指定され、住居の援助も打ち切りになるから、帰宅すると言います。「太陽と土があったから、これまで生きられた。飯館の土になるから、帰る。これも私の人生」と言う菅野さん。アレクシェービッチ氏は「**国は人間の命を守らない。最低の補償しかしない**」と断言します。「**被災者を社会から切り離し、のけ者にしてはならない。放射能の数値だけを見て、他人事にしている、人間は生き残れない。過去の基準に頼るのではなく、未来に向かって真実の声をあげよう。**」